H24 地域協働研究（教員提案型）

RB-05　「健康支援の専門家である県内看護師がつくる被災地住民の居場所づくりに関する研究」

研究代表者：看護学部　教授　三浦まゆみ
研究メンバー：蛎崎奈津子、平野昭彦、野口恭子、田口美喜子、渡辺幸枝、蘇武彩加（看護学部）

＜要旨＞

本研究では、震災直後から被災地に住む看護職の仲間の安否確認へ、そして被災地病院へ、避難所へ、仮設住宅へと活動の対象・場を求めて飛び回り、8ヵ月後にはある仮設住宅住民と交流の場を見出した盛岡居住の退職看護師有志の活動のプロセスを明らかにすることができた。組織に属しない看護職の災害看護活動の1つのモデルとなりうると考える。彼女たちは、今看護職のみの限界に気づき、他職種との協働へと活動を広げている。

1　研究の概要（背景・目的等）

東日本大震災の被災地域では、仮設住宅での被災住民同士のつながりの希薄化、先行きへの不安、食生活、活動の不活発さなど健康を害する要素が多く存在している。それらに対する支援として、病者はもちろん、健康を害していない人に対しての健康維持・増進に向けた支援を専門とし、風土を熟知した県内の看護師は「健康支援」をキーワードとした支援を通じ、被災地住民同士のつながりの中で個々の住民の健康に関するセルフケアの促進を行える適材である。被災後の一定の期間が経過しても中長期の支援が必要であるが、有職者には限界がある。そこで注目したのは、力量の大きい退職されたベテラン看護師の存在である。我々は、県内の看護師の力を活かした復興支援の方策への重要な示唆を得ることができると考え、内陸部に居住するベテラン看護師の被災直後から継続的な活動展開に関する後方支援をしながら、活動のプロセスを明らかにすることを目的として取り組んだ。

2　研究の内容（方法・経過等）

方法は、内陸部に居住する退職看護師有志11名で結成されたボランティアグループ「盛岡なでしこ」を研究パートナーとし、彼女たちの月1～2回の被災地への活動について情報を共有しながら､時に共に行動しながら、現地の状況、活動の様子を把握していった。そして、その活動を実際活動している看護師がどのように捉えているかを明らかにすることを試みた。

研究期間は平成24年7月～平成25年3月で、データ収集は平成25年12月某日、メンバーの中で承諾が得られた5名（平均年齢65.2歳、臨床経験平均36年）により約2時間のグループインタビューを実施した。

インタビュー内容は、①災害支援活動のきっかけ、②具体的な活動内容、③活動に至る経緯とかかわりを持った団体、④支援活動を通じて感じた被災者の変化、⑤看護職が行う災害支援活動について思うこと、である。

分析方法は、得られたデータを逐語録にした後コード化し、類似内容をカテゴリー化した。その後、時系列に沿って支援活動の実際とその活動にいたるプロセス、活動を通しての思いを整理した。今回は居場所づくりのプロセスに焦点をあて整理した。なお、本研究は岩手県立大学倫理委員会の承認を得た。

3　これまで得られた研究の成果

本研究においては、「盛岡なでしこ」のメンバーが、居場所づくりとして現在山田町のA仮設住宅団地内の集会所で月に1回のペースで昼食作り、血圧測定、健康相談、ロコモーショントレーニング、寄付されたミシンによる手提げ袋の製作等、住民らと一緒にできることを考え、楽しく…をモットーに交流会を開催している。インタビューの最後に、「交流1年後に当時の体験を語りはじめ、自分たち（盛岡なでしこ）を受け入れ少しずつ変わってきたという実感をもてた」という語りがあり、彼女たちの活動の成果がそのことばに集約されている。

写真1　昼食作りの様子

写真2　集会所で昼食交流の様子

写真3　体操の様子

写真4　手芸を通じての交流の様子

次に看護師の語りの分析から得た活動のプロセスは以下の８プロセスであった。

２～５は岩手県看護協会災害支援ナースとしての活動６～８はボランテイア団体「盛岡なでしこ」としての活動である。

カテゴリーは【】、その中に含まれたサブカテゴリーは［］で示す。

1.【災害発生直後、何かできることはないか思いつくところに連絡し、模索する】

［被災地在住の友人に支援物資を持って訪ね歩く］［何かしたいけど動き方が分からない］［元勤務地を訪れできることがないという情報を得る］［仲間に自分は何か支援できると発信する］［仲間から連絡が来る］［被災地に行く交通手段を探す］［思いついた看護協会に連絡して支援を申し出る］

⇓

－岩手県看護協会災害支援ナースとして－

2.【看護協会からの要請で、災害支援ナースとして釜石のぞみ病院で活動を開始する】

［釜石のぞみ病院から県にSOSの発信があり、県が看護協会に災害看護支援ナースの派遣を要請する‖看護協会からの要請で災害看護支援ナースとして出発する‖被害を受けた病院の中、ライフラインが十分復旧していない中での活動であった］［職員が過酷な中で勤務しているのを目の当たりにする］

⇓

3.【釜石のぞみ病院で患者の移送が始まり、移送に付き添う】

［患者を他院へ移送するのを手伝う］［十分な連絡手段がないため患者を受け入れる病院も混乱している］［自衛隊の搬送能力の大きさを目の当たりにする］［自衛隊の方と交流しながらの活動を行う］

⇓

4.【釜石のぞみ病院で自分たちの患者移送時のアセスメント・判断が認められる】

［スタッフが一時帰宅できる］［重症患者の移送が始まる］［判断力が求められる患者の付き添いを任せられる］［混乱の中で受け入れ病院側に患者を申し送る］

⇓

5.【災害看護支援ナースとして山田町の避難所で活動を開始する】

［自分たちでできないことは他者に紹介するなどつなぐ役割を果たす］［スタッフが一時帰宅できる］［災害看護支援ナースは県外者が多く自分たちの活動の意味を実感する］

⇓

避難所閉鎖に伴い岩手県看護協会災害支援ナース派遣終了

－ボランティア団体「盛岡なでしこ」結成－

6.【看護協会による災害看護支援ナースの派遣が終了となり、独自の活動を模索する】

［避難所引き上げの掃除を手伝う］［自分たちにできることはないか、これまでのつながりを頼りに探し回る］［調整してくれたところで活動を始めるが、日時の縛り、他組織との競合などやりにくさが生じる］［調整してくれたところで開始するが１回きりでつながりをつくれない］［仮設住宅に押しかけのようにとにかく行ってみる］

⇓

7.【キーパーソンを見つけ、山田町の仮設住宅での活動を開始する】 2011年11月～12月 （冬季休止）

［これまでのかかわりから調整役を見つける］［継続できるか分からない状況の中で月１回ペースの活動を開始する］［調整役とつながり関わりをもつ］［体操を提案し、継続的に実施するよう提案する］［手芸など受け入れらやすい企画を考える］［家で下ごしらえをし、昼食を共にする］［住民との信頼関係を築き上げることに力を注ぐ］

⇓

8.「仮設住宅での活動が軌道に乗り、イベントの内容も充実させていく」 2012年４月～

［集まった際のプログラムは参加者の興味のありそうなもの興味のもてるものにする］［自身の経験等も活用し気軽に取り組めるプログラムを考案する］［参加者のつながり作りも視野に入れて活動する］［集まった人たちが自由にできる場を提供する］［同じ仮設住宅の枠を超えてコミュニテイづくりに貢献する］［自分たち（「盛岡なでしこ」）を知ってもらい、住民のつながりを作る］

このようなプロセスが見出された。災害直後、県内外から組織的に多数の応援が入り支援活動が行われ、多くの人が何かしたいと感じていたが、どうしたらいいのか一歩を踏み出せない人も多くいたと思われる。そのような中、組織を持たない上、被災地ではない県内内陸部に居住する看護師が試行錯誤を繰り返し、さまざまな思いを抱きながらも自身の気持ちの置き場所をみつけ、継続的に関わるプロセスを見出したことは今後の活動の糸口になると考える。

４　今後の具体的な展開

現在もこの活動は継続している。さらにこの活動を行っていく中で、看護職だけの活動に限界を感じ、他と協働することはできないか、行政や他職種など組織的に運営されている支援活動とつながりをもち、連携を図っていくことが必要ではないかと考え、被災地ボランティアネットワーク「遠野まごころネット」に相談にいき、「遠野まごころネット」のボランテイアの方々と一緒に大槌町での新たな活動に取り組み、現在は２つの活動を続けている。

５　その他（参考文献・謝辞等）

研究パートナーである「盛岡なでしこ」の皆様に健康支援のありようについて大きな学びをさせていただき感謝いたします。またこの研究の趣旨をご理解いただき助成いただいた地域政策研究センターにお礼申し上げます。